

「巡さんが最後のお客さんですよ」

カットをしながら、琉基さんがそう言った。

「……そうなんですか」

（まあ、遅い時間だしな……。でも閉店までまだ時間はあるから、てっきり僕の後にお客が来ると思ったんだけど……）

琉基さんは、このサロンで指名が絶えないスタイリストだ。

初めて担当してもらったのは、たしか半年前。前の担当が別店舗に移って、紹介されたのが彼だった。

第一印象は、「若いな」だった。

顔立ちが整っていて、笑顔が多くて、話しかけやすい雰囲気がある。どこか軽そうで、最初はあまり期待していなかった。でも施術が始まると、指の使い方が違った。丁寧で、的確で、ちゃんと頭皮の状態を読んでいる。

「……もともとカラーダメージがあったの、ちゃんとケアしてるんですね」

最初の施術の終わりにそう言われて、「ちゃんと見てくれる人だ」と思って、次から指名した。口数が多いわりに、手が正確だった。それが信頼に変わるのに、そう時間はかからなかった。

「力加減、きつくないですか」

軽い声が、頭上から降ってきた。

シャンプー台に倒されたまま、お湯の音が耳元を満たしている。指が頭皮にゆっくりと入り込んで、泡を立てながら丁寧にほぐしていく。目を閉じると、温度と圧が混ざって、気の抜けた吐息が自然に出た。

「大丈夫です……」

(眠くなりそう。ちゃんと意識、保っとかないと…  
…)

琉基さんのシャンプーは毎回おかしいくらい気持ちよくて、意識が薄れそうになる。今日もそのまま身を任せていた。流れるシャワーの音と、じんわりした温度と、慣れた指の動き。

だから、気づくのが遅れた。

シャワーが止まった。タオルで水気を押さえられる。ここまでは何も変わらなかった。

「トリートメント、時間おいた方が効くので少し待っていてくださいね」

「はい」

仰向けのまま待っていると、ケープを整えるような素振りで琉基さんの手が動いた。肩をさすって、鎖骨のあたりに触れた。

「時間があるので、身体のチェックさせてください」

「身体チェック、ですか……？」

「はい。全身が頭皮の緊張と繋がってることが多くて。ちょっと確認していいですか」

「……え、は、はい」

そう言いながら、ケープの下にするりと手が入ってきた。

「っ……！」

（え……、）

胸のすぐ上に手が置かれた。服越しに、そっと。

「ちょ、ちょっと……、琉基さん、それは」

声は出た。でも、手を払いのけることができなかった。

「……ここが詰まると、頭皮への血流が落ちるんですよ。トリートメントの定着にも関わるので」

真顔で言う。施術の説明をするみたいな、口調で。

（え、でも。そこ、もうすぐおっぱいなんだけど…  
…）

困惑している間に、琉基さんが身体に触り始めた。最初はただ添えているだけみたいな触れ方で、まだ胸の上部だった。でも指が、じわじわと下に向かっている。

「あ、あの、琉基さん。僕、その、ちょっと……」  
「どうしましたか」  
「そ、その辺は……大丈夫なんで。頭皮に集中していただければ」  
「なんでですか？」  
「な、なんでって……」  
（なんで、って言われても。おっぱいなんて触られたら、流石にばれるし……！）

僕がカントボーイだということを、当然琉基さんは知らない。

当たり前だ、話したことなんてない。でもこのま

ま触られたら、確実にわかる。服の上からでも、形でわかってしまう。それだけは、なんとしても避けたかった。

「身体の方は、その、あんまり触られるのが得意じゃなくて……」

「そうなんですね」

一瞬、間があった。手が止まるかと思った。

「……でも確認させてください♡ 施術なんで♡」

笑顔だった。にっこりしていた。でも手は動いていた。胸の上に、じわりと、指に力が込められていく。

「っ……！」

（やばい、やばいやばい……ッ）

布越しに、形がわかるように触れた瞬間、琉基さ

んの指先が止まった。

一秒か、二秒か。

それだけの間が、やけに長く感じた。

「……」

何も言わなかった。でも手は動いていた。今度は確かめるように、ゆっくりと、おっぱいの輪郭を辿るように。

（バレた。バレてる……ッ）

顔が燃えるように熱くなった。目を逸らしたくて、でもシャンプー台に横たわったままではどこにも逃げられない。

「……巡さん」

「な、なんでもないです。ほんとに大丈夫なんで、続きを」

「おっぱい、あるんですね……♡」

静かな声だった。揶揄う色がなかった。ただ確かめるような、確認するような、そういう温度で言われた。

言い訳が出てこなかった。否定もできなかった。

「カントボーイ、なんですね♡」

それだけ言って、琉基さんはそのまま手を動かした。

むにゅ♡

「ちょ……ッ！ 待って、待ってください、そこは……！」

「施術ですよ♡」

「施術じゃないでしょ、それはッ……ん♡」

声が出た。布越しに揉まれただけで、情けないくらいはっきりと。

「……感度、良さそうですね♡」



笑っていなかった。でも声の端に、なにかが滲んでいた。

「やめてください、ほんとに……ッ」  
(でも手が、払いのけられない……ッ)

むにゅ♡ むにゅ♡ むにゅ♡

「ん……ッ♡ ちが、これは……ッ♡」  
「隠してたんですね♡」

静かに、琉基が言った。

「……知りませんでした♡」

手は止まらなかった。

布越しに重さを確かめるみたいにゆっくりと持ち上げられて、揉み込まれる。どう反応すればいいかわからなくて、声が半端に出た。

むにゅ♡ むにゅ♡ むにゅ♡ むにゅ♡

「ん……っ♡ ふ、やめて……ッ♡」

でも身体の方が先に答えを出していて、揉まれるたびにお腹の奥がきゅうっ♡ と締まる。下の方へ、じわりと熱が滲みていく感覚。脚が内側に寄った。

「……シャツめくりますね」

「え……っ！ だ、だめです、それは……！」

声を上げたのに、器用な指はもう動いていた。気づいた時にはシャツが首近くまで捲られてしまっていた。まだインナーがあるとはいえ、もうツンと上向く乳首ははっきり見えてしまっていた。

（シャツが……！）

「直に触れた方が、リンパの流れがいいので♡」

「え……あ、あの……ッ」

「乳首、わかりやすくなりましたね」

軽やかなトーンで言われたことが、余計に堪えた。